

# キド効果

海野十三

青空文庫



「うふふん。——」

と咳せきばら払いをなされた木戸博士は、ご自分の計算機からお立ちになり、ズカズカと助手の丘数夫おかかずおの席までお出でになった。

「こういう事になったよ。——」

と仰おっしゃ有ると、丘助手の前へ、三枚の曲線図をバサリと投げだされた。

「……」

丘助手は、突然の博士のお出でに、思わず襟えりを正ただして立上った——というより、飛上ったという方が当っているかも知れない。何しろ丘数夫は、この研究所では極ごくく新参者しんさんものなのであるから。

「この第一図、第二図、第三図の三つを見給え。すべては明めい瞭りょうすぎるほど明瞭じゃ」  
博士は Fig. 1 Fig. 2 Fig. 3 へ、英語で図番号をうつてある三つの曲線図を、一列にキ

チンと並べられた。

「はア——」

丘助手は頓とみに返辞もなりかねて、図面の上に視線のいなずまを降らせた。

(測定者・木戸とあるからには、これは先生の測定されたものに違いない。なんだか山の形をした曲線が出ているが、第一図のと第二図のとは富士山のような形だ。第三図のだけは、一二見浦ふたみがうらの夫婦岩を大きくしたように、二つの瘤こぶがある。これは一体なんのことだ)と丘助手は三つの図案を見較べ、ちよつと小首かたむを傾けた。

「実に明瞭じやろうが……」

と木戸博士は、お独りひとで感に堪たえながつて居おられた。

「はア、はア——」

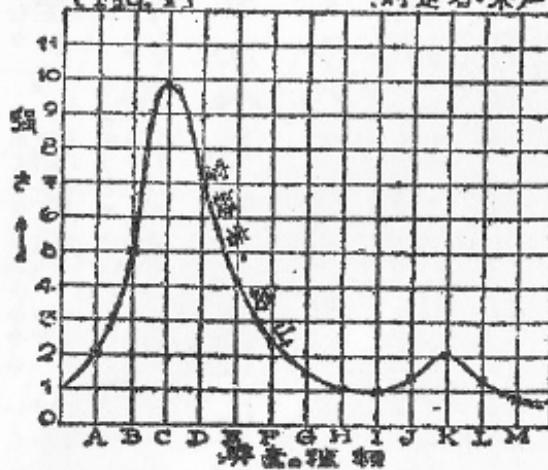
(で、これは早く三曲線の意味を呑みこまないと、先生に対して申訳ない——申訳ないらしい)と丘助手は一生懸命に理解しようと、三曲線をその網膜もうまくに送りこんでいる。(容疑者の烏からすやま山いそたにと磯谷いぬつかと犬塚——すると、これは三人の容疑者に関するものらしい。

三人の容疑者と……ハテナ……)

「ウン」と思わず口走つて、

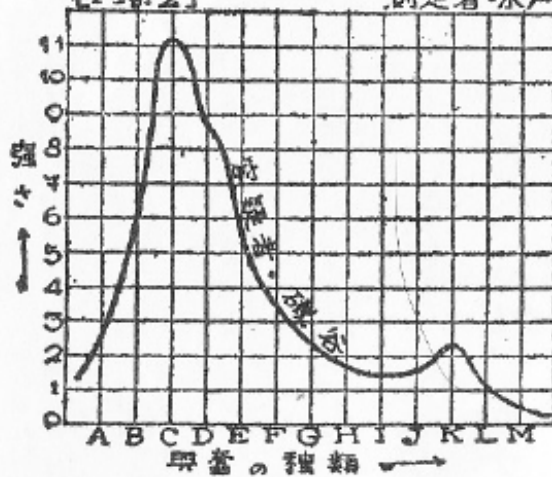
[Fig. 1]

測定者・木戸



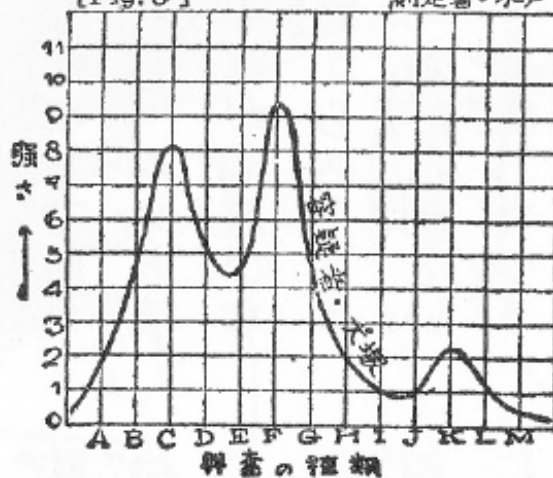
[Fig. 2]

測定者・木戸



[Fig. 3]

測定者・木戸



（そうだ。あの事件の容疑者のことかも知れないぞ）と彼は、ようやくのことで思いだした。

あの事件——とは？

それについて筆者は、次に短い紹介をして置きたいと思う。

## 2

満洲の、ずっと北の方の話である。

地図を開いてごらんになると判るが、東支鉄道が黒竜江省を横断している。

なおよく御覧になると、この東支鉄道は大興安嶺をプツリと横断しているのだ。場

所は博克図駅と興安駅との間に於てである。そしてもっと詳しく云うと、この両駅の間

に「興安嶺隧道」と名付けられた長さ三キロメートルつまり三十町ちかくもある大ト

ンネルがあつて、これが興安嶺をプツリと横断しているのだ。あの事件というのは、実に

この隧道内に於て起つたものなのである。

さて事件のあつた朝というのが、こと稍<sup>やや</sup>旧<sup>きゅう</sup>聞<sup>ぶん</sup>に属するが去年の夏八月の某日のことだつた。午前七時<sup>ちようじ</sup>丁<sup>てい</sup>度<sup>ど</sup>という時刻にこの博克<sup>ブ</sup>函<sup>ヘド</sup>駅を問題の列車は興安駅の方へ向つて進發したのだつた。長時間の夜汽車だつたもので、室内は煙草のひどい煙と、悪<sup>あく</sup>食<sup>じき</sup>乗客の口臭と、もう随分永く女なしでいる若い旅行者たちの何というかオトコ臭い匂いとで、ムツと咽<sup>む</sup>せかえるような実に堪<sup>た</sup>えがたい一夜だつた。それが間違<sup>まちが</sup>ひなくやつてきた黎明<sup>れいめい</sup>と共に、ガタンと落とした窓からスースー脱<sup>ぬ</sup>けていつてしまつて、代りに新鮮な空氣が、新鮮な朝という容器に盛られてみなみなに薦<sup>すす</sup>められ、ホツと蘇<sup>そ</sup>生<sup>せい</sup>したような氣持になつた。殊に列車が博克<sup>ブ</sup>函<sup>ヘド</sup>を出てからは、窓外にスクスクと伸びた白<sup>しろ</sup>樺<sup>かば</sup>の美林が眺められ、乗客も乗務員ももう何事も忘れて、貪<sup>むさぼ</sup>るように朝の空氣を肺臟へ送りこんでいた。

「あの白い白樺の幹と、女の股とは、どつちが色が白いだらうなア」

「ウン。うわツはツはツ」

「うわツはツはツ」

神をも恐れぬというべきであろうか、何といつても此処は奥地を走る列車内のことである。こんなあられもない言葉を吐き出す一団が、ひと車輛全部を貸切りにしていても、あ

えて驚くにはあたららない。

この一団というのは、開発移住団と称して一行四十名ひかたまり一と塊となつてくりこんできた連中なのであるが、開発の美名に隠れて何をするつもりか判つたものではないギヤング一味だった。それも、銀行を襲つてケチな金を奪い、後ですぐ検挙されるような青いギヤングとは少しギヤングが違うので、非常に統制と訓練とに富んだ云わば本格的暴力団ともいふべき種類のものであつた。一行は赤でもなく白でもなく、親分「岩」に率いられてその胸三寸次第で如何様いかようにも突入していったのだつた。

ただし此この「岩」こと岩いわおか丘岩九郎はその物もの凄すごい腕前をもつて、単なる風来ギヤングとしてでなく、或る有力者を脅迫し相当大びらに行動していた。それは、この怪けしからぬ一味が、当局の厳しい取締の網目あみめをすりぬけて此処ここ満洲を堂々と貸切列車で押し進んでいつているということから考えても、それと肯うなずけるだろうと思う。——筆わたくし者は簡単しやべに喋ると断つて置きながら、「岩」一味の説明に大変手間どつてしまった。

さて此の一団の乗つた列車は、白樺の美林びりんをめぐる二十七曲りをどうやら切り抜けた末、「ぼーッ」

と警笛一声、例の長さ三十町もあるといわれる興安嶺こうあんれい隧道トンネルのなかへ潜もぐりこんだ。



たちまち轟々とひどい隧道内の反響だった。明るい室内の光線が急に曇り、黒インキがどツと流れだしたように暗闇が押しよせてきた。

「ああ」

誰かが低い声で叫んだ。

「ああ、電灯が点かない……」

別の声が呻吟いた。

矢のように走り去る光線だった。僅かに残光が窓枠の四角な形を切り出していたが、それも吸い取紙で吸い取られるように薄れていった。そして遂に黒インキのような絶対暗黒がやって来た。その絶対暗黒という魔物は、尚も恐ろしい力で室内の空間を押し拡げていった。

レールの上に狂奔乱舞する車輪の殷々たる響が耳底を流れてゆく——それだけのこと  
の感覚で、乗客たちは自分が生きているということを辛うじて認識した。

しかし正確に言えば、この間自分の生きていることを既に認識し得ない乗客が一人あったのだ。

「ウーム」

という低い呻りうな声を耳にした者は、かなりにあつた。

はッ——。

と思う間もなく、ガンと厚い鉄板を一つ叩きつけたような音がして、それに引続き遠くの彼方へ地震が動いてゆくようなとても云うより外に云いあわし方のない気持の悪い振動が、ゴトゴトゴトと向うの方へ遠のいていった。

ふたたび列車が、パツと明るい隧道の向うへ脱けいでたときには、四十人の団員が、いつの間にか三十九人になつていた。

ガン、ガン、ガン。

機関車に近い方の扉が自暴やけに鳴つて、やつとそれがガラリと開くと、真赤な顔をした車掌がピストル片手に飛びこんで来た。

「だッだッ誰です。扉を内側から押さおえていたのは……。けッけッ怪しからん」

六尺豊かな、まるで角力取すもうとりのような専務車掌は、湯気ゆげのたつような怒り方だった。

ギヤング一団は、鬼がお姫様に化けたように取り澄まし、そっぽを向いて知らぬ顔をしていた。

「いまトンネル隧道の中で、何か変事があつたと後部車掌が報せてきたのに、これじゃ駈けつけ

ることが出来ないじやないですかッ。もしも重大なる変事だったら……」

「おおい、此処だア」と其の時、一輛後車室の窓から後部車掌が声をかけた。

前部車掌は車室を縦走して、後部車掌のところへ飛んでいった。

「あれを見ろッ」

後部車掌は真青な顔をして、握ったピストルの慄える銃口で指し示した。

「うわッ。——やったナ！」

前部車掌の顔面も、たちまち真蒼に変わっていった。

車輛と車輛との間が、鋼鉄車体のところといわず、連結器のところと云わず、真赤な血飛沫がベツトリ附着し、下の方へ雫がポタポタと墜ちていた。墜ちた真赤な斑点は、レールとともに飛ぶように後へ走った。

過失？ 故意？

二人の武装車掌は、ツと寄って耳打ちをすると強く肯き合った。そして両方に別れると何喰わぬ顔をして、貸切車室の両出口に立ちふさがった。

本部からは既に此の列車へ、例の一味を警戒すべしという電報がきていたし、隧道に入つて不思議に電灯が点かなかつたこと、そこへ今の惨事が発生したこと、これだけあれ

ば車掌たちの執るべき手段は至極明瞭だった。

果然、列車が興安駅に著くか著かない裡に、早くも警備軍の一隊がドヤドヤと車内に乱入すると、矢庭に全員の自由を拘束してしまった。

## 3

興安嶺トンネル殺人事件！

丘助手は改めて第一図、第二図、第三図を見直したのだった。

「うふふん。——」

と咳払いをなされた木戸博士は、乾枯らびた色艶のわるい指頭をFig. 1に近づけられて扱って仰有った。

「興奮曲線——と名付けるわしの研究じゃ。どうしてこの曲線を画くか。それはZツァイトシユ  
ソフト・フュール・フィジック  
F . . . P 誌 一九三〇年九月号第三〇頁に出して置いたところで明らかじゃ。要

するにその隅にある自記装置しきでこれだけのものが画けるんじや。凡およそ人間というやつは、興奮の振動体のようなもので、いつも二十四時間、なにかかにかの興奮に神経を焦こがしてゐる。腹が減つてくると、食欲が起り、牛肉のスキ焼が喰たべたいとか天井をムシヤムシヤやりたいとか興奮してくる。夜となれば昼間の精神的刺戟おが滓わりの如く析せき出してきてこれが夢という興奮もたらを齎もたらす。興奮のない人間というのは殆んど稀まれじや。

興奮は神経的なものじやから、電気現象の一種と考えることができる。そして電気現象であるによつて其の強さを測定することが出来る。強い興奮はメートルの針を大きく振らせ、弱い興奮はメートルの針を少しばかり動かす。ところでじや。わしが曩さきに Z・F・P 誌ペーに発表したとおり、わしは興奮を其の種類によつて分析することに成功したのじや。これは何しろ一ひと通りや二ふた通りの苦心ではなかつた。……」

そこで木戸博士は、研究当時の苦心を偲しのぶかのようにジツと瞑めい目もくし、しばし手を額の上に置かれたのだつた。

「実に骨を折つたものじや。しかし結果をいえば至極簡単である。興奮の種類を分けることは、丁ちよう度どラジオ受信機の目盛盤めもりばんを廻すと、その目盛に應じて各所の放送局が出てくるのと同じことじや。東京の第一放送が出ているのを、すこし廻すと広島 F K の放送が出

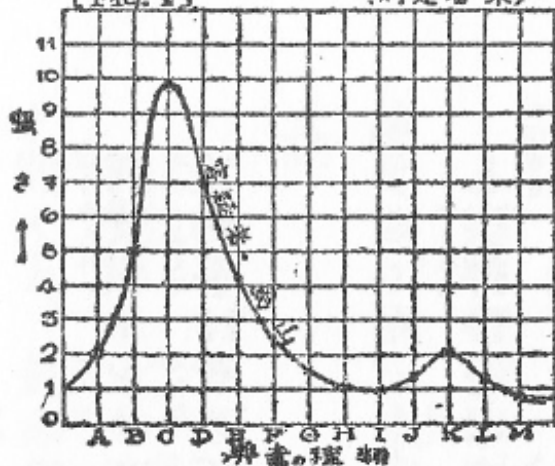
る。もつと廻すと札幌の I K、名古屋の C K、新潟の Q K、熊本の G K、静岡の P K、仙台の H K などという具合に、二十七ヶ所の違った放送が目盛盤のひねり様よう一つで出てくる。

それと似た仕掛けを、例の装置の中に設けてもうさえ置くと、興奮の種類を分けることが出来るばかりか、さまざまの興奮の強さを知ることが出来る。ラジオの目盛盤をひねって各局を聴いてみると、東京の第一放送は強いが、広島の放送は大変弱いとか、札幌のは全然感じないとか、次の名古屋のは東京第一ほどではないが相当に強いとか……そんな風に強さを比較することが出来るのと同じじゃ。つまり A の興奮は強さが 2 で、B の興奮は強さが 5 で、C の興奮は強さが 6、D の興奮は強さが 7 などという風に、強さがメートルの上にあらわれる。それを図に画くと、Fig. 1 のような曲線になる。よいか——」

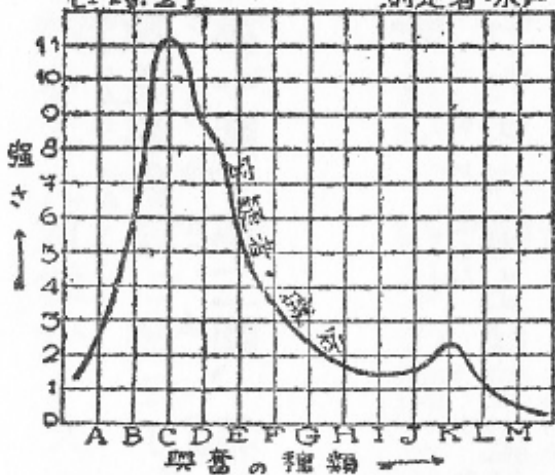
木戸博士は鉛筆を手品師のように何処からともなく取出されて図面の端にスラスラと数字を書き並べられたことである。

「まず A が 2 じゃ。すると横の軸に『興奮の種類』がとってあって、その A の上に、強さを示す縦の軸の数字 2 の高さの一つの点を X と記す。次に隣りの B の上に、興奮の強さをあらわす 5 の高さをとり X 印をつける。それから C の上には、一番強い 6 の高さのところつなに X 印を書きこむ。——こうして求めた点はもつと多いのじゃが、その点で線を横に繋ぐ

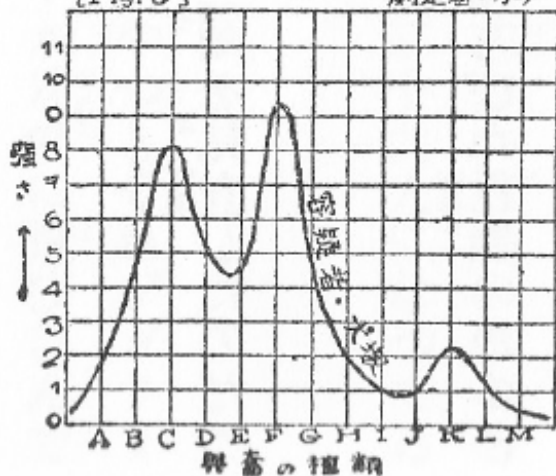
[Fig. 1] 測定者・木戸



[Fig. 2] 測定者・木戸



[Fig. 3] 測定者・木戸



とこの Fig. 1 のような曲線になる。この曲線を一と目見れば、其の人間に宿っている興奮が手にとるようにアリアリと判る。そこで次の Fig. 2 Fig. 3 も、同じ手段で興奮曲線をとることが出来たのじや」

測定者・木戸——とサインされてある此の貴重な三つの曲線の意味は、漸く助手の丘数夫の頭脳に臚おぼろげ気ながら理解されるに至った。しかし A とか B とか C とかいう興奮の種類は、じたい如何なる興奮を示すのであるか、容疑者の鳥からすやま山とは誰か、磯谷いそたにとは、犬塚ぬつかとは？

## 4

「先生」と丘助手が呼びかけた。

「うふふん。——」と博士は咳せき払いほらいをもつて答えられたが、講義の腰を折られたことを腹立たしく感じていられることは、その咳払いの調子からソレと察せられるのだった。



# Fig.1

---

A	.....	2
B	.....	5
C	.....	10
D	.....	7
E	.....	4
F	.....	2,5
G	.....	1,5
H	.....	1
I	.....	1
J	.....	1,4
K	.....	2,1
L	.....	1,3
M	.....	0,8

「先生。これは例の興安嶺殺人事件と関係のある問題なのでございますか」

「……」博士は無言で、暫しは口をモゾモゾせられたが、これは変者をもって鳴る博士の性状として「然り」を意味するものに外ならぬ。「それで三十九人の同車していた連中について、この興奮曲線をとったのじやが……」博士の話はイキナリ実験の話へ飛んだのである。

博士としては無理もないことである。理学博士木戸信之氏は真面目なる学徒以外の何者でもない、随つてシャーロック・ホームズでもファイロ・ヴァンスでも、また帆村莊六でもないから、事件の続き具合などを話す気持はない。これは筆者が鳥渡解説をして置こう。

40-1=39%、三十九人の残りの人々の上に、殺人の嫌疑が落ちた。殺人であつて自殺ではないことは、後に隧道の中から探し出された轢断屍体の咽喉部に残る紫色の斑紋から明らかなことだつた。扼殺——つまり喉を締めたのだ。そして屍体を窓の外へ突き落としたのだつた。屍体といつてもまだ生暖いやつが、車輛と車輛の間からレールの上に落ちるが早いか、ザクリとやってしまったのだつた。パツと飛び散る血潮が車輪から車体の下部から周囲一面を真赤に染めた。

さてこれは本来ならば、大した問題にもならず、通り一遍の刑事問題として扱われ、適当な人間が犯人と名乗り出て処刑されれば済む筈だった。だが本件に限り甚だ面倒な事情があった。殺されたのは、「松」こと椎名咲松という男であつて、これは団員となつてゐるが、実は其の筋の密偵をつとめていた人物だった。椎名咲松の殺されたことは公けに對しての挑戦と見られた。そこで事件は俄然複雑な雲行きとなつて、其の筋では其処に立ち現れた偽のロボット犯人をオイソレと受取つて処刑するのでは、一味への威厳上どうしても好ましくならぬことであつた。どうしても真犯人を見出して処刑し、永年の癌であつた彼等一味の、のさばり加減を撓める必要があつた。

ところで犯跡を調べるといふことになるに係官はハタと当惑しないわけにゆかなくなつた。それというのが、なにしろ同車していた三十九名は皆一味のもので、親分の岩の命令で互に連絡をとり、決して都合の悪い真実を喋ろうとはしなかつた。そればかりではない。なにしろ真暗な隧道内の出来ごとだ。調べるにして調べるべき問題がない。犯行のあつた時刻の前後五分間というものは、全く暗黒だったのだから。今から内地の優秀な係官を派してもこれも駄目だった。証拠とすべきものが非常に少ない上に、悪に長けた三十九名が気を合せて証拠湮滅をはかるのだから、これは探し出そうという方が無理である。

遂に万策ばんさくつきて、已やむなく木戸博士の出馬しゅつばを乞こわねばならぬこととなつたわけだつた。博士も自信は大してあるわけではなかつたが、考えの末自分の研究装置に多少の改良を加えて、これに臨むこととなつた。そこで三十九人の生き残つた一味に対して、「興奮曲線」がとられたのだつた。三十九枚の曲線から、博士が最後に摘てきしゅつ出したものは三枚で、これが鳥からすやま山栄二郎、磯谷いそたにきようすけ狂助、犬塚いぬつかひようきち豹吉という人間から得たものだつた。三人は未だに、博士の研究室に監禁せられている。他の三十六人は釈放せられ、或者は再び満洲に赴き、或者はもう断念して他へ足を向けた。

「……その中でわしの注意を集めたのは、この鳥山、磯谷、犬塚の三人の容疑者のものじや」

と博士は語られる。

「一体この興奮曲線の種類に、ABC云々うんぬんと區別することは出来ているのじやが、Aは何の興奮、Bは何の興奮という風に、全部がハッキリ判っているわけではない。目下わしは研究中なのだが、まだ完全でない。しかし今度の問題を解くには充分間に合う。というのが、此のCという興奮は憎悪ぞうおとか嫉妬しつととかいふ種類のもので、このように著いちじるしいのは三人に限る。殺人の動機としては、充分に憎悪なり嫉妬の興奮がないと、手を下せないものじ

や。この三人のみに、このC興奮があることがわかった。過去現在将来に人殺しをすればこの三人の内じゃ。

ところで Fig. 1 と Fig. 2 の 鳥山からすやま、磯谷いそたにの両名のは先ずよい。注目すべきは Fig. 3 の容疑者犬塚いぬづかのものじゃ。これにはF興奮と名付けるべきものが、極めて著しく出ているではないか。このF興奮とは何ものかというに、これはわしの研究結果によると、実に殺人興奮を現わすものなのじゃ！」

「すると此この犬塚という人が、殺人者なのでございますか」  
丘助手は、あまりに明瞭な結果に舌を捲いて叫んだ。

「そうじゃ、犬塚豹吉が椎名咲松を締め殺して、列車から突き落したのじゃ」  
「ああ、それにしても……」丘助手は、博士の門に入ることの出来た喜びを沁しみ々と感じたことだった。「この憎にく々しく聳そびえ立つ殺人興奮の曲線？」

「これさえ見れば如何なる悪漢あくかんといえども犯行はんこうを隠かくしきれものではない」  
「先生。では此の装置を早速さつそく大量に製作して全国の法廷と警察に送られては如何でしょうか。無駄な取調べを廃して、直ぐ事実が判明するわけですから、司法上の一大改革だと思えます」

「だがしかし……。うふふん」と木戸博士は首を左右に振った。「この興奮曲線を取るには非常な熟練が要るのじゃ。大学院を出てきた君にすら、こうはうまく取れない筈じゃ」

## 5

理学士の称号を貰い、三年の大学院の研究を終えて来た丘助手にとって、博士の仰有つた一言は、いくら木戸博士と仰ぐにしても、聞き捨てになり兼ねた。そこで彼は博士に熱心に乞うて、例の装置をつかつて、例の犯人から興奮曲線を測ることを許して貰いたいと頼んだ。

「じゃ、やって見給え」

博士は遂に折れて、丘助手の望みを叶えて呉れた。

丘助手は、監禁室から犬塚を引張り出すと、実験室の台上に引据えた。そして其の身体の直ぐ近くに装置を搬ぶと、複雑なスイッチや抵抗器やダイヤルを操って、興奮曲線を

出すために数値を観測したのだった。

そしていよいよ書き上げた曲線というのが、第四図に示すようなものであった。測定者という項目には、「丘」と肉太のサインを入れることを忘れなかった。

「ほほう——」と博士は提出されたFig. 1を、博士が前に同じ犬塚についてとったFig. 3と並べてみて、妙な声をあげられた。

笑われているのか喜ばれているのか、丘助手には暫しが程は全く不明だった。

「これは相当なもんじゃ」と博士は鼻眼鏡を外しながら仰有った。「C興奮とF興奮とが明瞭に出ているね」

「ははア——」丘助手は先ず安心をした。

「だがじゃネ」と博士は鼻眼鏡で丘の作った曲線図を叩きながら仰有った。「まだまだ実戦に臨むのには青いじゃよ。これ見給え、例えばC興奮じゃ。わしの結果でも三人の内  
 で此の犬塚が一番低けれど兎も角も8を越えている。しかるに君のは5.5ぐらいだ。肝心のF興奮はまた莫迦にひどく出ている。見たところ曲線の形も僕のとは大分変っている  
 じゃないか。これが熟練と不熟練との相違じゃ」

「仰有る通りです」と丘助手は恐縮した。

「それからもう一つ此処を見給え」と博士は第三図のK興奮のところを指した。「このところに著しくいちじるないが、K興奮が出ている。君のはまるで男の胸のように扁平フラットで、何も出ていないじゃないか」

なるほど博士の測定した分には、第一図から第三図まで、こここのところに少し高いところが出ているのに、丘助手には無かった。可也かなりやったつもりだったが、どうしても出なかったのだった。

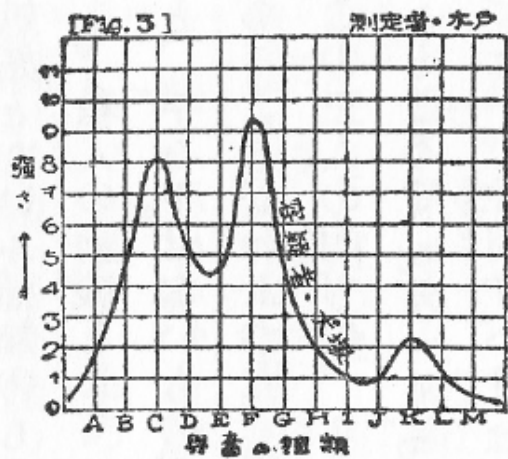
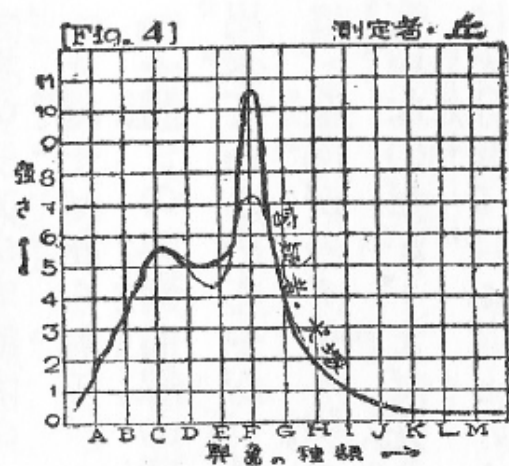
「どうも有難とう存じました」恐縮しきつた丘は、そこでヒョコリと頭を下げた。

## 6

それから二ヶ月の月日が流れた。

其の日、丘助手は午前中大学に出勤するばんに当たっていた。彼は例のとおり第二十八番教室に出て、十四五人の理科の学生のために、「脳組織に於ける電気振動論」を講義して





いた。

そのとき入口の扉がパクリと開いて、一度も笑っている顔を見たことが無いといわれる  
用務員・喜見田が入ってきた。彼は無言のまま教壇に近づくと、一枚の紙片をその上に載  
せ、まるで何事もなかったような顔をして、又前の入口から出ていった。

(何ごとだろう?)

丘先生——すくなくとも唯今の時間、この教室に於ては——黒板に書き連ねている数式  
を途中でやめて、机の上の紙片を見た。そこには次のような鉛筆の走り書がしてあった。

「木戸博士から再三再四電話が懸つてくるので、時間中ながら鳥渡お伝えする。曰く、  
大学の講義なんかいい加減にして早くこつちへ帰つて来ないと首にするぞ、とき。松  
下  
生」

松下というのは、丘よりも一年前に卒業した助教授の名だった。

これで見ると、何か急用が出来たらしい。真逆学生たちに「講義なんかいい加減にしろ  
といわれたから」と云つて退場するわけには行かないから、急用だといって講義を打切つ  
た。

自動車を拾い、慌てて木戸博士のところへ帰つて来た丘助手は、室に入るなり、博士の

様子がお違いになっていて、おどろいた。あの沈着な博士が、まるで檻の中に入れられたライオンのように、室内を歩き廻っていられたのだ。無論、丘助手が入って来たことなどには気のつかれぬ模様だった。

「先生。唯今帰りました」と丘は声をかけた。

「おお、丘君」博士は興奮にギラギラ輝く眼を助手の方に向けて叫んだ。「いや、大変なことを発見したのだ。わしはそれに「キド現象」という名称をつけたよ。それで直ちにわが学界へ発表すると同時に、英米独仏の四ヶ国の学術協会へ原稿を急送したいのだ。君、直ぐに翻訳にかかってくれ給え」

丘助手は、博士が錯乱せられたのかと一時は考えた程だった。しかし事情は段々と判つた。

「……そういうわけで、わしは興奮曲線の中から、更にK曲線を抽出することに成功したのだ。これ見給え」

そういつて博士は、Fig. 5と書いてある第五図を、自分の机の上からもぎとるようにして丘助手の前に置かれた。その図を見ると、これは今までの曲線図とはまるで違っていた。K興奮にあたるところに、僅かの隆起のある曲線で、わざわざ「木戸現象を導出

するに至りたる根拠の曲線」と書き込まれていた。

「これがK興奮曲線といたいものだ。これは前から疑問に思っていたのだが、例の三人の容疑者烏山、磯谷、それに真犯人の犬塚の三人の興奮曲線の中にも、それぞれ認められる隆起なのだ。強さは殆んど一樣だ。他の著しい興奮を消してみると、結局このFig. 5になるのだ。この三人に共通なK興奮なるものは、一体何を意味するものだと思う。答え給え」

博士は正面からズツと丘助手を睨みつけるようにして云われた。

「さあ、私には判りませんが」

「判らん？　じゃ教えてやろう。これは異常興奮なんだ。精神異常者としての素質のあるのを物語る興奮なんだ。そして此の異常性興奮のあるのは例の三人だけではないのだよ。

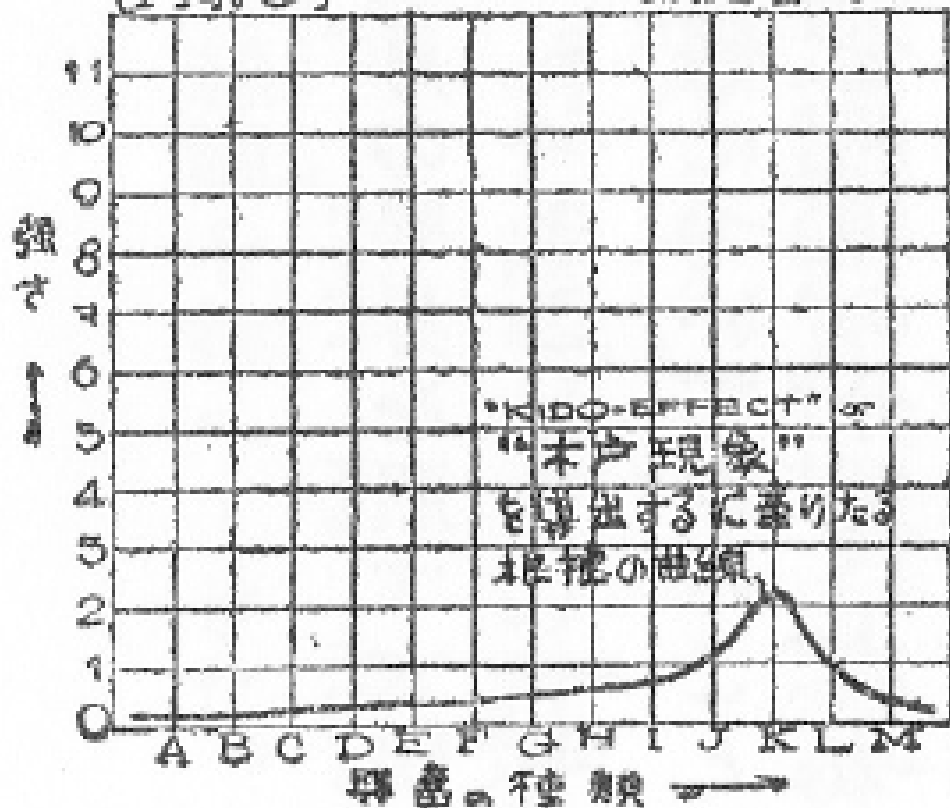
こうあんれい トンネル 興安嶺隧道殺人事件に関係のあった残りの三十六人について測定した曲線にも、少しづつ現れているのだ。わしが其の他に測定したものにも大抵K興奮の隆起がでてい

つまり結論はこうだ。『人間は誰人に限らず、精神異常の素質を有す』ということになる。素敵な発見じゃないか」

「例外はないのですか。つまり、ソノK興奮のない人間は……」

[Fig. 5]

測定者・木戸



「有るには有る。しかし最近わしの測定した分には全てK興奮がある。無いという例外は、古い昔に測定したものの中にチラホラするだけで、それは問題は無いと思う。兎に角、人間は誰でも精神に異常を来す素質があるんだ！　なんとこわいことではないか。丘君」

「イヤ恐ろしいことです」

いい気持のしない第五図から眼を外すと、丘はツと立って、翻訳に使うため、辞書の並んでいる書棚の方へ歩を運んだ。

## 7

キド 現象！

それを発見した木戸博士の名声は、世界の学界を照す太陽の如く、赫々としてうち昇った。さもあるべきことで、一年前には、興奮曲線を一人一人の人間の身体について取ること成功した博士が、短日月の間に更に興奮曲線の分解に成功し、異常興奮曲線を摘

出したばかりか、人間にあまね遍く異常性素質の潜在していることを指摘し、これをキド現象と名付けたのだから、誰しもおどろ駭くのも無理はなかった。今や博士の心理物理学とでもいべき学問は、世界開発の将来の鍵を握るものだととして、遽にわかに学界の注目の標ひょうてき的となつた。

ところが突然、全く突然に、キド現象の発見者木戸博士が失しつそう踪せられた。

『木戸博士の行方不明に世界学界は大だい恐きよう慌こう！』

『ドクター・キドは失踪後五日をふ経るも、何等消息発見されず！』

『木戸博士は何者の手に誘拐されたか。キド現象と興奮曲線にまつわる因いん縁ねん！』

『懸賞金一百万円。木戸博士を無事に自邸じていへ返したものに送る！』

などと、新聞やラジオは博士の失踪のことで持切りだった。

だがどうしたものか、博士の消息は杳ようとして聞えなかった。

そして或る日、警視庁の捜査課長が、博士の研究室に、留守居るすいの丘助手を訪ねた。丘数夫は折りふし、孜孜ししとして机の上に拮ぎげた学位論文にペンを走らせていたが、課長の姿を認めると、ペンを留めて元氣よく声をかけたのだった。

「やあ、ようこそ、大江山さん」

大江山は捜査課長の苗字みょうじだった。

「また御邪魔に参りましたよ」課長は照れくさそうに云った。「今日は御約束の十三日もありませんし……」

「僕も忘れやしません。ですが警視庁のお見込はどうなったんですか」

「そいつを聞かれると、大いに憂鬱ゆううつになるのですがね」と大江山課長は禿かかった前額まへがしらをツルリと撫であげた。「いつかのギヤング一味が邪魔になる木戸博士をやつつけたものと考えて方針を樹たてたのです」

「すると——」

「ところが、どんなにやってみても、一向に駄目なんです。調べれば調べるほど、彼等ギヤング一味に関係のない証拠が上つてきて、実際困りましたよ。今度という今度はネ」

「それで……」

「それで——とは痛い御言葉ですな。こうなれば、貴方の御説を拝聴するより外に、途みちがなくなつたんです」

「そうですか」と丘助手は大きく肯いた。「では今までの行き懸がりを忘れて、僕の説をお話しいたしましょう」



そういうと丘は机の上から、沢山の曲線図を抱えてきた。

「また曲線図ですか」

課長は苦が笑いをした。

「徹頭徹尾、この曲線図ですよ」と丘助手はニヤニヤ笑った。「さあ御覧なさい。これが有名なる木戸博士のキド現象の曲線図です」

そう云つて既に知られている第五図を課長の前に置くと、別に第六図というのを取り出して、この両図を並べた。後の方には明らかに、「測定者・丘」という署名があつた。

「横に並べたFig.6というのは、実は僕の研究の結論なのです。キド現象を現すFig.5の方を抹殺して、代りに此の方を皆さんにお薦めしたいのです」

「なんですつて？」課長は目を見張つて駭いたのだつた。

「こつちには曲線がないじゃないですか」

「あるには有るのです。ほら——」といつて丘は図の横軸の極く近くにある、まるで平坦な、力としても有るか無いか判らぬ位の曲線を指した。「この有るか無いかの曲線——つまりこれはラジオで云うと、放送ではなくて、雑音と同じようなもので、本当はなんにも無いものなのです」

「ほほう——」課長は狐につままれたような形だ。

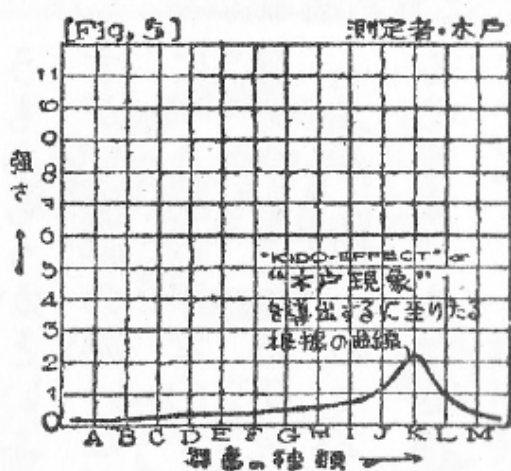
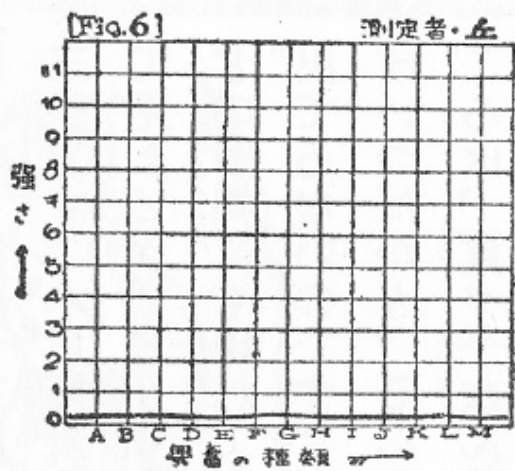
「言葉をかえていうと、『人間には誰にでも必ず精神異常の素質がある』というのがキド現象です。僕のは『人間には誰にでも精神異常の素質があるとは云えない』という反対の結論なんです」

「精神異常の素質がないというのですか。そいつは一応有難いことだ。しかし博士には確かにK興奮が多数の人からとった曲線に出ていますよ。失礼ながら、貴方の測定の誤りではないのですか」

「お疑いは御尤もです」と丘はニコニコ笑って云った。「しかしこれには根拠があるのです。実は僕は木戸博士の御測定に或る疑問をもって、極く最近のことですが、大学の理科主任教授里見先生立会の上、例の容疑者三名について興奮曲線を取り直してみたのです」

「ああ、有名なる里見謙先生ですか」

「そうです。里見謙先生です。ところが結果は予想通りに木戸博士のとは違って出ました。これです。第七、八、九図の三つです。木戸博士の測定せられた第一、二、三図を並べて見ましよう。どうです。博士の方のには同じ形のK興奮が、どの曲線にも現れているのに、



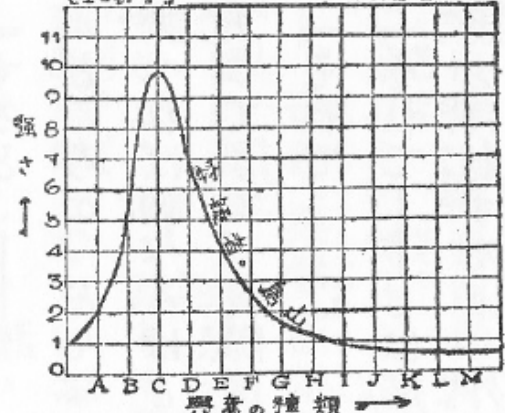
僕の測定した分には一つも出ていないのです。どれもこれも男の胸のように——博士はいつだかも、そんな風に云われましたが——興奮のところは、真ツ平またいらなんです。これが本当の曲線なんです。こうもあろうかということとは、ずっと以前、僕の入所当時ですが、恰好の悪いながら、第四図というのを取ったときに、この扁平なのが出たので、鳥渡ちよつと疑いをもったのです。其の後いろいろ研究の結果、一層確信するに至りました」

「すると博士のキド現象に現れているK興奮は一体どうなるのです。またそれが博士の失し踪つそとなにか関係があるのですか」

「実にお気の毒なことですがね」と丘は顔を曇くもらせて云った。「博士には精神異常の素質が潜在していたのです。博士は多分それにお気がつかれなかつたらしい。測定者木戸博士のその異常興奮が、博士の測定されるあらゆる実験結果の中に混入していたのです。恰あたかも測定される方の人間に精神異常の素質があるように誤解されていたのです。これは外にも似たようなことがないでもないのです。「身体ボデー効果エフェクト」というのも其の一つですが、測定者が身体を装置に近づけ過ぎると今まで地球の方へ逃げていた電気が、今度はその身体を通じて逃げてゆくため誤解を生ずる——という効果をいうのです。木戸博士の身体に隠れていた異常素質が、興奮曲線に誤りを混こん入にゅうさせたんです。『キド現象』という恐ろおそ

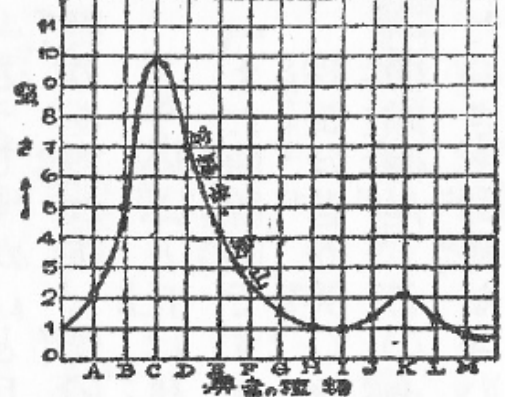
測定者・金

[Fig. 7]



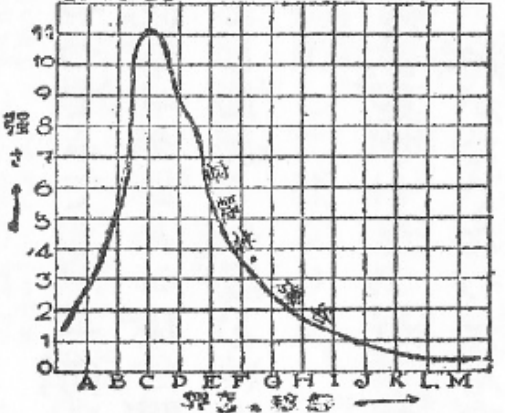
測定者・水戸

[Fig. 1]



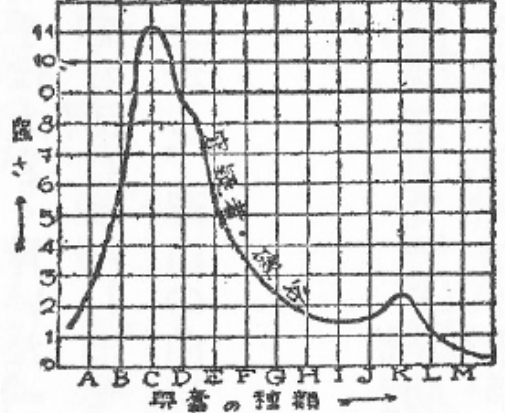
測定者・金

[Fig. 8]



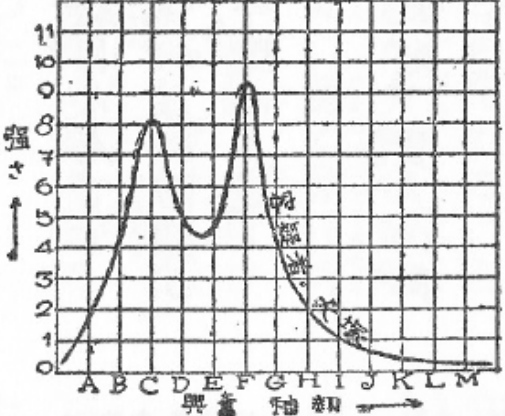
測定者・水戸

[Fig. 2]



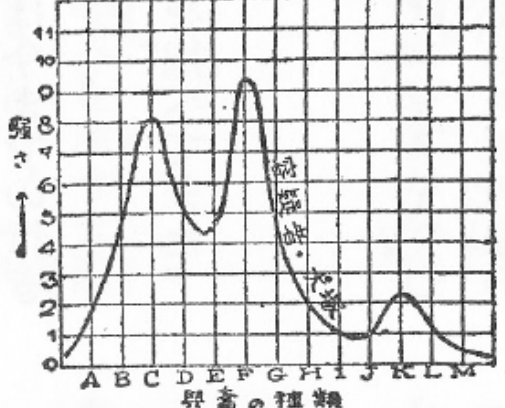
測定者・金

[Fig. 9]



測定者・水戸

[Fig. 3]



しい発見は要するに間違いだつたんです。此の誤差混入の効果を、われわれは『キド現象』と呼ぶ代りに、これから『キド効果』と呼ぶことにしたいと思います。第五図のあのK興奮の曲線は博士が、不識のうちに自らこの『キド効果』を摘出されたのに過ぎません」

そういつて丘数夫は口を噤んだ。

「すると今、木戸博士は……」

大江山課長が口に出した。

「そうです。先生は悲しい運命の指すままに到頭発病せられたのでしよう。その動機と  
いうのは、『キド効果』つまり昔のキド現象を発見されたという、その大きな興奮に  
刺戟されて隠れていた異常素質がドツと爆発したのだと思います」

丘数夫はもうそれ以上に、気の毒な木戸博士のことを口にする勇氣はなかった。

# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

底本の親本：「新青年」

1933（昭和8）年1月号

初出：「新青年」

1933（昭和8）年1月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5186）を、以下の箇所を除いて大振りにつくっています。

「二十七ヶ所の違った」

「英米独仏の四ヶ国」

※図版は初出からとりました。

入力：門田裕志

校正：宮城高志

2010年9月9日作成

2011年1月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# キド効果

海野十三

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>